



TITLE:

# バクトリアにおける佛教寺院の一時的衰退

AUTHOR(S):

岩井, 俊平

---

CITATION:

岩井, 俊平. バクトリアにおける佛教寺院の一時的衰退. 東方學報 2013, 88: 422-403

ISSUE DATE:

2013-12-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/180562>

RIGHT:

## バクトリアにおける佛教寺院の一時的衰退

岩 井 俊 平

### は じ め に

古くバクトリアと呼ばれ、漢文で吐呼羅國、吐火羅國、覲貨邏國などと記されたアム川上・中流域の兩岸地域<sup>1)</sup>は、クシャーン朝期以降からイスラーム化が進行する 8 世紀頃までの間、サーサーン朝、キダーラ、エフタル、西突厥といった外來の集團によって支配・統治されていたものと考えられている (圖 1)。近年は、シムズ=ウィリアムス N. Sims-Williams によってアフガニスタンのルーイ Rūy 地域に由來するとされる一連のバクトリア語文書の解讀が進み [2000; 2007; 2012a; 2012b], 少なくとも當時ローブ Rōb

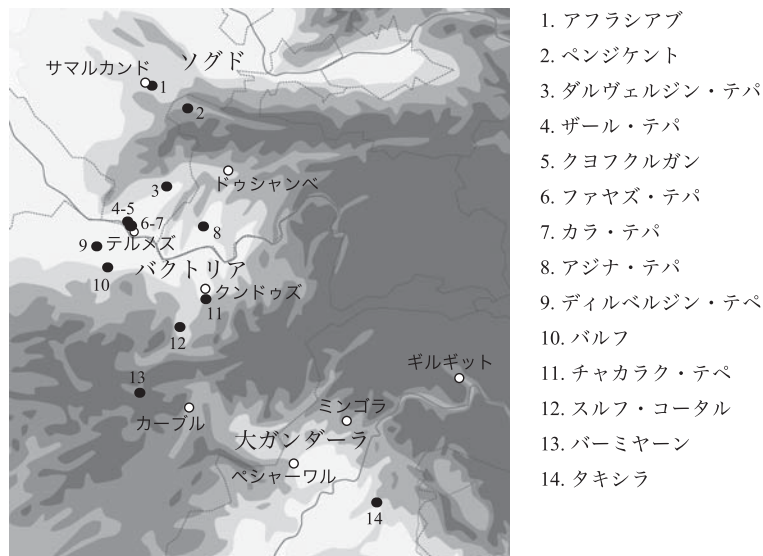


圖 1 関連地域地圖

1) この地域をどのように呼稱するかは難しい問題で、筆者はかつて、アラビア語・ペルシア語史料と漢文史料の違いを指摘するために、前者で言及される「トハーリスターン Tokhāristān」の呼稱を用いた [岩井 2004]。本稿ではアラビア語・ペルシア語史料に当該地域が登場する以前の問題を扱うため、「バクトリア」と呼んでおきたい。ただし、取り扱う範囲に関して前稿と変更は無い。

と呼ばれていたらしい一地方の統治や経済の具体的な様相が明らかになりつつある<sup>2)</sup>。

一方で、「奴隸制」とか「封建制」といった社会制度を基準にした歴史研究も、舊ソ連圏を中心にして行われてきた。奴隸制＝古代、封建制＝中世という圖式に基づき、古代から中世への過渡期が激しい社会的危機を伴うものであるということが自明のこととされていたため、アム川北岸地域における考古學調査の成果が、このような社会制度研究に援用されることとなった。すなわち、当該地域において多くの都城址が4世紀後半に廢絶し、その直後からロシア語で *замок* や *кёшк*、あるいは *крепость* などと呼ばれる單獨の宮殿、小型要塞が出現しはじめることをもって、古代奴隸制から中世封建制への過渡期に入るという假説が廣く主張されてきたのである〔Седов 1987: 114-116; Аннаев 1988: 8, 49-51; Брыкина (ред.) 1999: 5〕。「初期中世 Раннесредневековье」と呼ばれるこの時期区分は、研究者によって指し示す年代が若干異なるものの、現在でも中央アジア史における重要な畫期と考えられている<sup>3)</sup>。

そこで本稿では、上述した歴史觀の元となっている考古學的なデータを檢證し、バクトリアの4世紀以降の状況を考察する。ここで結論を先に述べれば、多くの佛教寺院が4世紀後半に一時的に機能を縮小あるいは停止する一方で、これまで5世紀後半に出現するとされてきた宮殿あるいは小型要塞の一部は、より遅い時期に建造されたもので、社会的危機と呼べるような極端な變遷が4世紀後半から5世紀に起こったわけではないことが判明する。この結論に関しては、筆者がこれまで述べてきた論點〔岩井 2003; 2004〕と大筋で變更はないが、近年新たに加わったデータも存在するため、以下では改めてこの點を論じていきたい。

## I 佛教寺院の廢絶時期

### 1. カラ・テパ

カラ・テパ Kara Tapa は、現ウズベキスタン、テルメズの北西郊外に所在する佛教遺

---

2) 日本語による最近の研究では、一連のバクトリア語文書に登場する地名についての宮本亮一の論文がある〔2012〕。

3) ドゥ・ラ・ヴェシエール E. de la Vaissière も、こうした舊ソ連圏の研究を基本的に受け入れている〔2005: 101-102〕。しかし、チャカラク・テパ中層期の年代を5世紀前半までと斷じてそこに認められる灰層の存在を強調するなど、首肯できない點も多々ある。一方、グルネ F. Grenet は、キダーラ期およびエフタル期の中央アジア史を暗黒時代のように捉える傾向が欧州の研究者にあることを指摘し、4世紀後半の危機は確かに存在するがすぐに乗り越えられると主張することで、そうした従來の見解を否定している〔2002: 203〕。註 14) も參照。

跡群で、すでに 80 年近い調査の歴史がある。特に、1961 年から継続的に行われたスタヴィスキー Б. Я. Ставиский を中心とするソ連の考古学者たちによる調査は、日干レンガとパフサで構築された地上のストゥーパや僧房をはじめとする建造物と、小高い丘の岩盤を削り抜いて造った半地下式の石窟とがセットとなった複合的な寺院のあり方（報告においてはコンプレックスと呼称される）を明らかにした。その報告書 [Ставиский (ред.) 1964; 1969; 1972; 1975; 1982; 1996] においては、遺構とともに佛教関連の彫刻や壁畫、貨幣や土器などの詳細な情報が掲載され、遺跡群の動態を大雑把に把握することが可能である。一連の研究によれば、カラ・テパの佛教遺跡群は後 2 世紀前半には少なくとも一部が建立されており、4 世紀頃から徐々に衰退するが、6 世紀には再び活動をはじめる可能性が指摘されている [Ставиский (ред.) 1996; Zeymal 1999]。

創建がクシャーン朝期に遡る点については、出土貨幣による推定のほか、出土した石灰岩彫刻に認められる特徴などが根拠として提示される。また 4 世紀頃の衰退については、石窟内の禮拜堂が埋葬用に利用され、そこに副葬された一括の土器と貨幣により、遅くとも 4 世紀後半には佛教寺院としての機能を停止していたと考えられる点が根拠となっている [Ставиский (ред.) 1975]。

カラ・テパにおいて一括で副葬された土器については、以前に筆者が取り上げ、當該地域の土器編年における重要な基準とした [岩井 2003]。この年代観については、このあとダルヴェルジン・テパ Dal'verjin Tepa の佛教寺院址 (DT-25) の編年でも述べるように、変更の必要を認めないが、この年代をもってカラ・テパ全域が衰退していたかどうかについては再検討の餘地がある。というのは、近年、カラ・テパに関しては新たな發掘が行われたほか、これまでに出土した銘文の書かれた土器片の報告 [Fussman 2011] が出版されたことで、多くの新しい情報がもたらされたからである。

1998 年から、ピダーエフ III. Пидяев および加藤九祚によって行われているカラ・テパ北丘の發掘は、長邊で約 22.4 m を測る方形基壇が残る大型ストゥーパ、それを囲む祠堂列、中庭を囲む多数の小部屋を持つ方形僧房、その他の奉獻ストゥーパを伴う地上寺院の姿を明らかにした (圖 2) [ピダエフ・加藤 2007; Fussman 2011]。大ガンダーラ地域<sup>4)</sup>で廣く認められる典型的な伽藍配置が、バクトリアのカラ・テパ内の寺院にも採用されていたことを明らかにする畫期的な發見であった。大型のストゥーパは、このあとに述べるファヤズ・テパ Fayaz Tepa などと同様に、より古い小型のストゥーパを包み込む形

4) ガンダーラという地名の用い方についても多くの議論があるが、本稿では、ベシヤール盆地を中心として、タキシラ、スワート、ジャラーラーバード、カーピシー・カーブルに及ぶ範囲を假に「大ガンダーラ」という名稱でまとめておく。

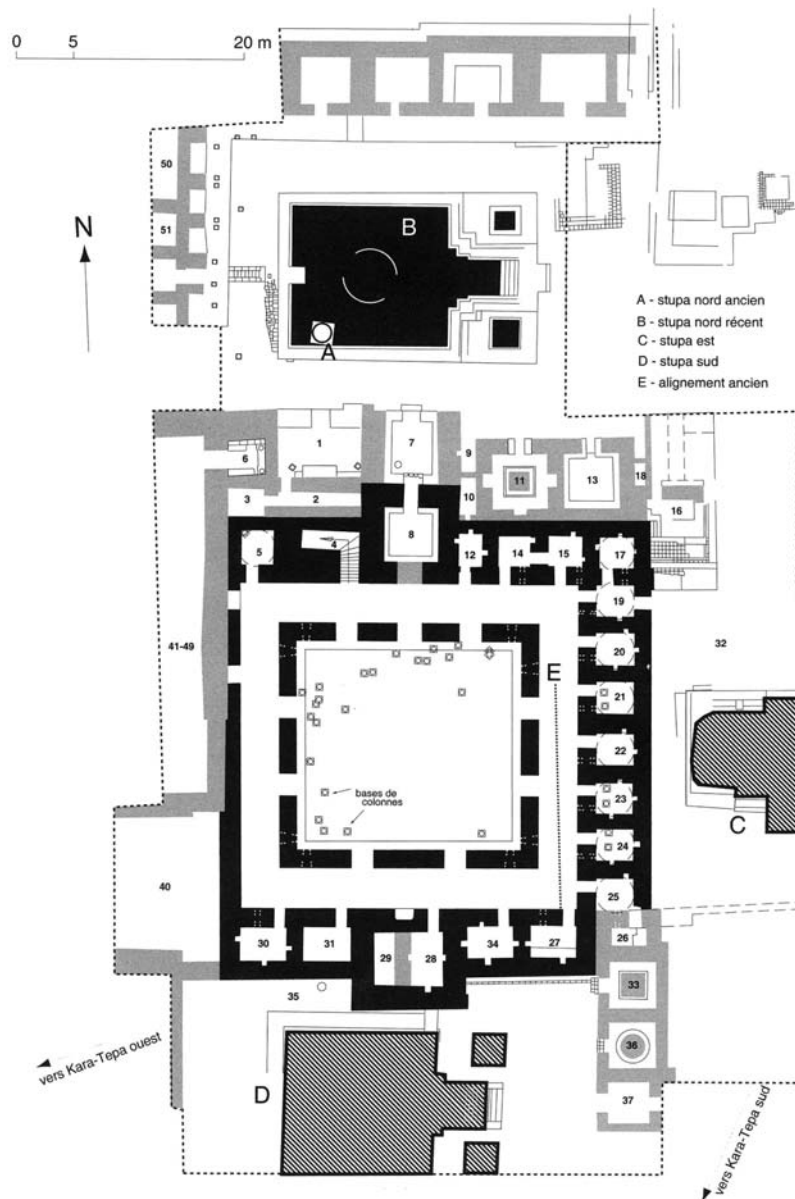


図2 カラ・テパ北丘の佛教寺院平面図 (Fussman 2011 : Planche 18 を一部改変)

で建造されているが、6世紀以降にこの地域で採用される十字形のプラン〔岩井 2006〕にはならないため、5世紀頃に改修された可能性も否定できない。さらに方形僧房については、特に東側の小部屋がスキッチ・アーチを用いたドーム天井に仕上げられていることから、クシャーン朝期まで年代が遡ることは考えられず、これも5世紀以降の年代が

想定される<sup>5)</sup>。この事例から言えることは、4世紀後半において、カラ・テパ南丘におけるコンプレックスでは、石窟内が墓地に転用されるなど、佛教寺院としての機能に衰退が認められるものの、新たな寺院の改修が北丘で進んでいるという見方も可能だということである。佛教寺院の衰退が4世紀後半のごく一時期のみであることを示す貴重な事例となる可能性もあり、今後、発掘の全貌を示す報告書が刊行されることを期待したい。

また、フスマン G. Fussman によって刊行されたテルメズ周辺出土の墨書入り陶片の報告書 [2011] は、特にカラ・テパとファヤズ・テパ出土品を中心とし、兩遺跡の近年の調査を含めた概要を知ることでもできる重要な内容である。カラ・テパ出土品について見ると、ブラーフミー文字、カローシュティー文字、草書體ギリシア文字といった各墨書の書體からある程度の年代を推定できる陶片が213点存在し、そのうち5世紀以降の可能性が高いのは8点のみである。この点からも、カラ・テパの佛教寺院としての活動が、5世紀以降急激に衰退していることが裏付けられる。ただし、報告者自身は4世紀後半以降の断絶を認めず、寺院は7世紀まで活動を継続していたとする [Fussman 2011, vol. 1: 17-18, n. 9]。確かに、先に述べた北丘における新たな知見と合わせて考慮すれば、寺院活動が継続していたという見方も可能であろうが、寺院内の数か所に墓域が広がることも事実であり、その規模が縮小したと考えるのが妥当である。

## 2. ファヤズ・テパ

ファヤズ・テパ (圖3) は、カラ・テパの北北東約1 km に所在する單獨の佛教寺院址で、長邊約18 m の方形基壇を持つストゥーパと、中庭を囲む多数の小部屋を持つ方形僧房、それに隣接する施設からなる [Альбаум 1974; Fussman 2011]。大ガンダーラ地域の寺院の伽藍配置に比較的近く、著名な出土品である石灰岩製の佛坐像にも明らかなガンダーラ彫刻の影響が見て取れる。ストゥーパは、カラ・テパ北丘のものと同様に、より古い小型のストゥーパを覆うように構築されていることが判明しており、近年、全面的な保存修復事業に合わせて、遺跡の再調査が行われた。その際、このストゥーパ改修に連動する僧房と関連施設の改修も明らかになっている<sup>6)</sup>。

5) 正方形プランの上に圓形ドームを架構するための構造としてのスキンチ・アーチは、基本的にはサーサーン朝の建築に由来するものと考えられており、その原形はアルダシール1世以前から存在するものの、バクトリアやヒンドークシュ山脈周辺で認められるスキンチは多くが5世紀以降に造られたものとされる [Le Berre 1987]。したがって、カラ・テパへのスキンチの導入も5世紀以降である蓋然性が高いが、当然のことながら個別に検討する余地は残されており、断定はできない。

6) フスマンの報告による [Fussman 2011 vol. 1: 24-25]。これまで、このストゥーパは最終ブ

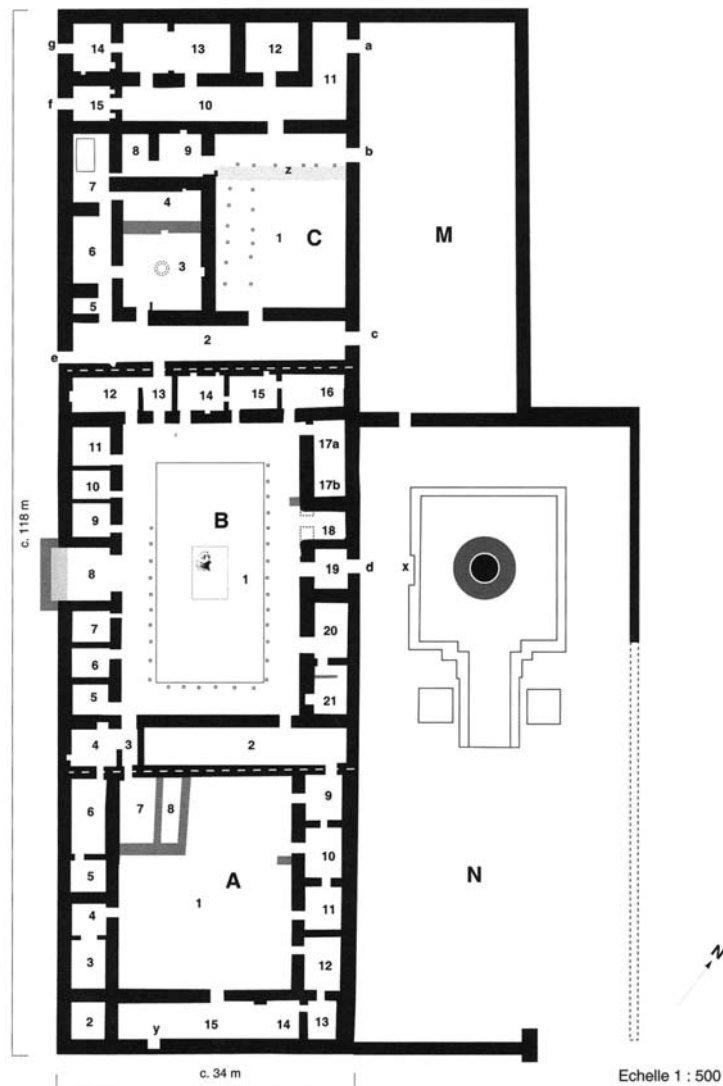


図3 ファヤズ・テパの平面図 (Fussman 2011: Planche 21 を一部改変)

寺院活動の開始時期は、報告された墨書の書體および関連施設の壁中から出土したソテル・メガスの貨幣などから1世紀に遡るものとされる。その後、いわゆる大クシャー

的に十字形の平面に改修されたとされ [加藤 1997: 21]、そのような復元図も公開されていたが、修復に際しての調査ではそのような成果は認められないようである [Lo Muzio 2012: 189]。





圖4 ファヤズ・テパ出土壁畫（筆者撮影）

この2～3世紀頃の改修に伴うものであり、廢絶時期は墨書の書體から西暦400年頃という [Fussman 2011, vol. 1: 25]。この廢絶時期については、墨書の書體以外には決め手がなく、カラ・テパや次に述べるダルヴェルジン・テパ第2佛教寺院ほどには明確にできないものの、僧房で検出された壁畫の1つが、寺院活動が4世紀までは繼續していたことを示す證據となる可能性もある（圖4）。

この壁畫は、おそらく佛像を禮拜する供養者列が描かれたもので、その中央には、牡羊の角の付いたヘルメットあるいは冠をかぶる人物の姿が認められる。白い光背が描かれていることから、神像か王侯であろうが、このようなヘルメット・冠は、4世紀以降のクシャノ・サーサーンのパフラム王<sup>7)</sup>およびキダーラの貨幣に認められる特徴である。羊の角を頭部にあしらう裝飾に關して言えば、アレクサンドロス大王の指標ともされ<sup>8)</sup>、また王妃や女神の冠にも認められるが [田邊 1994]、そのような表現は、クシャーン盛期の2～3世紀前半の出土資料には認められない。貨幣や印章での事例が4世紀に多いことから考えれば、この壁畫も4世紀頃に描かれた可能性が高いのではないだろうか [Lo Muzio 2012]。僧房の建築自體はクシャーン朝期に改修されたものとしても、壁畫に關してはそれより新しいどの段階でも描くことが可能だからである。ただし残念ながら、寺

7) ここでは、クシャノ・サーサーン國王の名稱および編年について、Cribbの研究によっている [Cribb 1990; 2010]。

8) 實際、この供養者像は、長くウズベキスタンの考古學を牽引しているルトヴェラーゼ E. B. Ртвеладзе によってアレクサンドロス大王として紹介されている [ルトヴェラーゼ 2006]。



院が4世紀末頃で廢絶したかどうかは、墨書の書體によってしか判断できないのが現状である。

### 3. ダルヴェルジン・テパの第2佛教寺院

ダルヴェルジン・テパは、現在のテルメズから北へ100 kmほどの地點、スルハン川の西岸にある都城址である。グレコ・バクトリア期から8世紀頃までの居住が確認されており、ウズベキスタンの考古學者たちによって長く調査されてきた〔Пугаченкова, Ртвеладзе и др. 1978〕。佛教寺院は2か所確認されており、特にシャフリスタン内に存在する「第2佛教寺院址」(DT-25)は、創價大學とウズベキスタンの共同調査隊によって發掘され〔創價大學編 1996; 2012〕、多くの佛教彫像（すべて泥像）が出土したことで知られている。これらの彫像の年代（すなわちDT-25が佛教寺院として機能していた時期）については、3～4世紀頃か、あるいは5世紀以降かという議論があったが、現在は3～4世紀頃という見解でまとまりつつある〔創價大學編 2012: 161-172〕。筆者自身も、この寺院の出土土器を編年した際、下層床面から出土した土器と上層床面から出土した土器の違いに注目し、佛教寺院として機能していた下層床面の時期を4世紀末までとした〔岩井 2003: 52〕。

近年、この見解を補強しうる新たな調査が行われている。2006年から行われたDT-25の發掘では、佛教彫像が出土した床面と同じレベルの床面から炭素資料が採取され、放射性炭素年代測定にかけられた。その結果、多くが3～4世紀後半の年代を示したのである〔創價大學編 2012: 228-237〕。これにより、DT-25が佛教寺院として機能していたのは4世紀後半までであることはほぼ確實になった。さらにDT-25は、寺院廢絶後も新たな床面が構築されて異なる機能の建物として使用されていたことがわかっていることから、ダルヴェルジン・テパ全體が4世紀後半に機能を停止していたわけではないことも判明するのである。

### 4. その他の佛教寺院

アム川北岸では、上記の他にもクシャーン朝期に機能していたとされるいくつかの佛教寺院が調査されている。ダルヴェルジン・テパの第1佛教寺院〔Пугаченкова, Ртвеладзе и др. 1978: 90-97〕、フヴィシュカ創建を明記するバクトリア語碑文が出土したことで知られるアイルタム Airtam [Pugachenkova 1991/92]、ザール・テパ Zar Tepa 都城址の内外にあった佛教寺院址〔ピダエフ 2001〕、カフィルニガン川下流のウシュトゥル・ムッロ Ushtur Mullo [Литвинский и Седов 1983: 75-79; 加藤 1997: 45-46] などである。いずれも廢絶年代については不明瞭であるが、4世紀までにはその機能を縮小あ

るいは停止していたとされている。また、ウシュトゥル・ムッロについては、6世紀頃にストゥーパを平面十字形に改修して、再びその活動を開始するという [Литвинский и Седов 1983: 75-76; 加藤 1997: 46]。

一方、アム川南岸の南バクトリアにおいては、クシャーン朝期まで遡る確實な佛教寺院遺構は見つかっていない。ただし、アイルタムやファヤズ・テパの彫刻と共通する、石灰岩製の佛教彫刻は多く知られている。それらは、チャムカラ・テペ Chamkala Tepe, リリ・テペ Lili Tepe, アホンザーダ・テペ Akhonzada Tepe といったバグラーン・クンドゥズ周辺の遺跡から出土したと伝えられるほか [水野編 1962], クンドゥズ南東のチャカラク・テペ Chaqalaq Tepe からは、実際に石灰岩製佛教彫刻が学術的な発掘によって出土している [樋口・桑山 1977]。スルフ・コータルのクシャーン貴人像およびガンダーラ彫刻との比較から、美術史家の多くは4世紀前半までの年代を想定しているようである [宮治 2002: 85-86; 田邊 2011]。

## 5. 小結

以上、バクトリアにおける4世紀以前の佛教寺院址を概観した。クシャーン朝期から存在していた寺院が4世紀以降にその機能を縮小あるいは停止する可能性が長く指摘されてきており、土器や貨幣によってある程度の分析が可能な遺跡の再検討も、同様の結論となった。さらに、近年になって公表された資料（土器に描かれた墨書の書體や放射性炭素年代測定の結果）も、この假説を補強するものであった。

確認可能な遺跡の絶対数が少なく、さらに南バクトリアにおいては明確な寺院遺構が検出されていない状況であるため、今後の調査の進展によっては假説の再考も必要になることが豫想される。しかし、少なくとも現状では、4世紀後半にバクトリアにおいて佛教寺院の活動が縮小あるいは停止する点を、考古學的な考察の結果として指摘することが可能である。

## II 單獨の小型要塞の出現時期

ここでは、佛教寺院という特殊な機能を有する遺構と對比するために、バクトリアにおける4世紀以降の都城址あるいは居住址の状況を確認していきたい。すでに述べたとおり、舊ソ連の研究者たちの間では、当該地域における4世紀後半から5世紀にかけての時期は、大きな社會的危機に見舞われた古代から中世への過渡期として認識されている。佛教寺院の活動が確かに4世紀後半に縮小していたらしいことは上に示したが、これは都城址や居住址にも及ぶ現象なのであろうか。この点を確認するために、5世紀半ば

の建造とされる單獨の宮殿あるいは要塞 (замок, кёшк) と呼ばれる遺構を検討する。これらは、「莊園領主」の出現と関連し、封建制の開始を畫する重要な建造物と考えられているからである。同時に、衰退するとされる都城址の年代も改めて検証していくこととする。

## 1. クヨフクルガン

クヨフクルガン Kuyovkurgan は、テルメズの北約 25 km に所在する遺跡であり、これまでは中世封建制の開始を畫する典型的な遺跡として 5 世紀半ばに建造されたと考えられてきた [Аннаев 1988: 40, 60]。しかしながら、この遺跡の最下層から出土した土器が 7 世紀以降の資料である点については、かつて拙稿で述べたとおりであり [岩井 2004: 8-9]、5 世紀半ばの年代を與えるのは難しい。

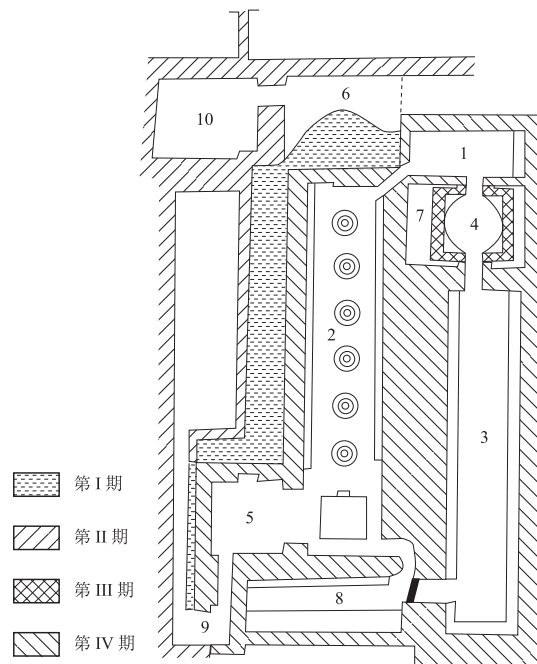
加えてアンナエフ Т. Д. Аннаев は、この遺跡の年代を推定するにあたって、出土した塑像を取り上げている [Аннаев 1988: 62, рис. 21, 22]。クヨフクルガン出土塑像がかなり獨特であることを斷りつつ、アフガニスタンのパルフ北西に所在するディルベルジン・テペ Dil'berdzhin Tepe の佛教寺院から出土した塑像と比較し、様式の共通性から同時期 (エフタル期がはじまる 5 世紀後半) に位置づけられると結論する。

そこで、ディルベルジン・テペの佛教寺院 (發掘區 VI) の様相を確認しておきたい [Клугликова и Пугаченкова 1977: 61-90, 塑像は рис. 64, 65]。長邊方向で約 21 m を測るこの遺構には 4 つの層位的な建築期が認められ、佛教寺院が屬するのは後半の時期であるという。ここでは、報告された平面圖 (圖 5) に従って、古い建築期を第 I 期、新しい建築期を第 IV 期と呼んでおく<sup>9)</sup>。問題となる塑像が出土したのは部屋 2 であり、その周囲を構成しているのは最終 (つまりもっとも新しい) 第 IV 期に構築された壁である。同じ時期に機能していたのが部屋 3・部屋 7 であり、部屋 7 については、それより古い時期に建造された部屋 4 を含む込む形になっている。部屋 1 は第 IV 期にも機能しているが、その構築は第 III 期で、部屋 4 と時期的に併行する。

佛教寺院および問題の塑像が所屬する第 IV 期の年代を決めるにあたって、その参考になる遺構・遺物が、一段階古い第 III 期に屬する部屋 4 と部屋 1 から出土している。まず

---

9) ただし、この層位の名稱は報告の後半で説明もなく變更される (pp. 83-84)。そこでは、「佛教寺院には少なくとも三つの建築期」が存在し、「佛教寺院が機能していたのは第 III 期」であるという。この説明の中で、第 II 期に屬する部屋 1 と 4 には二つの床面があると述べられていることから考えると、平面圖においては、報告で言っている「第 II 期」を二段階に分けていると考えるのが妥當かもしれない。いずれにしろ、佛教寺院が活動していたのはこの遺構のもっとも新しい時代であるという基本認識には變わりがないので、本論の内容そのものには影響しない。



(Клутликова и Пугаченкова 1977 : рис. 54 を一部改変し再トレース)

圖5 デイルベルジン・テペの佛教寺院の平面圖

は、部屋4を構成するスキンチ・アーチとドーム天井である。幸いにして非常に残りが良く、日干レンガ積みによる持ち送りの技法が明瞭に確認可能である。すでに觸れたとおり、アフガニスタン周辺でこの技法が導入されるのは5世紀後半以降であると考えられており(註5)を参照)、第III期の年代の上限を示唆する。

さらに、部屋1から出土した小型のガラス瓶が重要である(圖6)。このようにガラスひもを巻きつけるタイプの瓶は、他にチャカラク・テペ上層期、後で述べるダルヴェルジン・テパの城塞、そしてソグド地域のペンジケント Penjikent などで出土しており、すべて確實に7~8世紀の年代を與えることができる資料である。こうしたことから考えれば、第III期がすでに7世紀頃に屬していると考えられ、第IV期(佛教寺院および塑像)の上限もその頃に設定しうることとなる<sup>10)</sup>。

10) 出土遺構・遺物の状況に係わらず、デイルベルジン・テペの佛教遺跡がこれまで5世紀後半に位置づけられてきたのは、そもそもこの都城址全體がエフタルの襲來によって5世紀後半に終焉を迎えると考えられているからである。ドゥ・ラ・ヴェシエールもこの見解を受け入れているが[de la Vaissière 2005: 102]、拙稿では都市の繼續の可能性を指摘した[岩井 2003: 52]。



1. ディルベルジン・テベ出土 (H. 8.7cm, Кругликова и Пугаченкова 1977: рис. 77 をトレース)
2. チャカラク・テベ出土 (H. 5.9cm, 樋口・桑山 1970: Fig. 62 を再トレース)
3. ダルヴェルジン・テベ出土 (H. 8.6cm, 筆者撮影)
- 4, 5. ペンジケント出土  
(H. 4.0 - 8.0cm?, Беленицкий, Бенгович и Большаков 1973: рис. 37 をトレース)

図6 ガラスひもを巻き付ける小型ガラス瓶の出土例

したがって、アンナエフの言うようにクヨフクルガンとディルベルジン・テベ佛教寺院が同時期になるのであれば、前者の年代も7世紀頃まで下げる必要がある。この結論は、出土土器の分析と完全に一致しており、クヨフクルガンの建造年代が7世紀頃である蓋然性は高まったと言えよう。

## 2. ザール・テパの城塞とシャフリスタン

ザール・テパ Zar Tepa は、テルメズの北方約 26 km に所在する都城址である。その城塞（あるいは宮殿）部分は、4 世紀後半から 5 世紀初頭のシャフリスタンの放棄 [ピダエフ 2001: 43, Завьялов 2008] に伴って、5 世紀半ばに居住が開始されるという [Аннаев 1988: 45]。つまり、クシャーン朝期の都市が衰退したあとに建造される単獨の小型要塞ということで、クヨフクルガンと同じ位置付けを與えられている。

城塞部分については、出土土器編年の再検討をすでに行っており [岩井 2004]、最下層の土器は 5 世紀後半よりも新しく、6 世紀後半頃の様相を示す。したがって、クヨフクルガン同様、この城塞の出現と、彼らの言う「初期中世」の開始年代は一致していないということになるのである。

續いてシャフリスタンの状況を確認しておきたい。上で觸れたとおり、これまでは

シャフリスタンの放棄と城塞の居住開始が同時期とされており、放棄の年代は4世紀後半から5世紀初頭とされてきた。しかし、出土している土器には、注口付の片把手の瓶で、赤色のスリップの上から線状のミガキを施して装飾とした資料が含まれている[Альбаум 1960: 19; Пигаев 2001: 36-37]。カラ・テパの北丘からは出土している型式の土器であるが(加藤編 2002: 31)、南丘の禮拜堂の墓地に一括埋納されていた土器群には含まれないもので(岩井 2003: 圖 10)、5世紀後半あるいは6世紀まで十分に及ぶ型式である。したがって、シャフリスタンには5世紀以降に及ぶ居住層が存在していた可能性が高く、これまでのように5世紀初頭までにすでに放棄されていたという假説は受け入れにくい。その場合、都城内の佛教寺院址や、3~4世紀とされるガルータを描いた壁畫[加藤編 2002: 36-37]についても位置付けの見直しを行わなければならないだろう。

### 3. ダルヴェルジン・テパの城塞

本遺跡の佛教寺院についてはすでに述べたが、ここでは都城址南東にある城塞のあり方を検討していきたい。日本の古代オリエント博物館およびウズベキスタンの共同調査により、1996年から新たな發掘調査が行われており、最上層の6~8世紀に屬する遺構・遺物が具体的に明らかになった[田邊・堀他 1997; 1998; 1999; 2000; 田邊・山内他 2001]。圖6で示したガラス瓶も、この調査によって出土したものである。

ここで注目したいのは、一連の平面調査と並行して行われてきたトレンチ調査である。城塞の堆積状況を平面發掘に先だって把握するために設けられた調査區であり、最上面での平面が約7.5m × 4.5mを測り、最終的には深さ約9mに達した。最下層におけるグレコ・バクトリア期の土器窯にはじまり、最上層の8世紀頃の遺構に至るまで、基本的に斷絶なく遺構・遺物が出土しており、これは發掘後の斷面でも確認することが可能である<sup>11)</sup>。すなわち、グレコ・バクトリア期からクシャーーン朝期を経て、大きな社會變動があったとされる5~8世紀にも繼續的に人々が居住しているということになる。

また、一連の發掘で平面的に掘り下げられた發掘區であるDTC4區においては、6世紀頃に屬する居住層である第II層の下層に、灰層と炭化物が厚く堆積している層が存在する。この層は、第II層で確認されるよりも一段階古いと考えられる土器片が多く含まれることから、北側に存在していた5世紀以前の居住區のごみ捨て場と想定されている。つまり、城塞全體の中で、建て替え等に伴う居住區の移動が存在していた可能性が高く、一部の灰層や炭化物をもって、遺跡全體の破壊や廢絶を唱えるのは危険であることも示

11) 一連の調査の正式な報告書については、現在準備中である。



しているのである。

さらにシャフリスタンについても、4世紀末で放棄される可能性が古くから指摘されてきたが [Пугаченкова, Ртвеладзе и др. 1978: 181], 第2佛教寺院廢絶後に再利用の痕跡が認められることから、都市全體が4世紀後半に衰退したわけではないことはすでに述べたとおりである。したがって、この都城址も、4世紀後半から5世紀の遺跡の廢絶には当たらないのである。

#### 4. 小結

ここで見たとおり、5世紀に出現するとされてきたいくつかの小型要塞の一部は、最初の建造が6世紀後半あるいは7世紀以降に降るものもあることが判明した。さらに、ザール・テパ、ダルヴェルジン・テパでは、5世紀にも継続的に機能している地點が存在することを、土器によって確かめることが可能である。したがって、4世紀後半から5世紀の時期に遺跡の廢絶や新たな出現が集中するということが一概に言えるわけではない。無論、一部の遺跡ではそのような事態もあったであろうが、「古代から中世への社會變動」と定義付けられるほどの極端な變遷は、考古學的には見てとることができないのである。

文獻史學および貨幣學等から研究される當該地域のおおまかな變遷を考えたとき、サーサーン朝の侵入によるクシャーン朝の崩壊や（3世紀前半）、同じくサーサーン朝のシャープール2世による遠征（4世紀後半）<sup>12)</sup>、複数の遊牧民集團の移動（4世紀後半?）<sup>13)</sup>、エフタルによる支配の開始（5世紀半ば）など、大きな畫期になりうる事象をいくつか挙げることは可能である。しかし、こうした政治史に係わるような畫期と、考古學的遺跡の動態における畫期が必ずしも一致しているわけではない點は注意を要する。さらに、舊ソ連圏の研究者が指定した4世紀後半から5世紀の「社會的危機」は、基本的には考古學的方法による成果から主張されたものであったが、逆に發掘内容の精査によって否定することが可能である。都城址及び居住址の廢絶や出現は、より大きな變遷の中で再度検討する必要があるだろう<sup>14)</sup>。

---

12) 西暦380年頃に、バクトリア語文書の日付表記において月名がバクトリア語から中期ペルシア語に替わる事實は、4世紀後半の南バクトリアにおいてサーサーン朝の影響力が増大していたことを示すと見て問題なかろう [Sims-Williams 2002; 宮本 2012: 437-436]。

13) キダーラやアルハン、エフタルなどを含み込んだ遊牧民集團が4世紀後半頃に北方からソグド、バクトリア地域に侵入した可能性については、ドゥ・ラ・ヴェシエールが指摘し [de la Vaissière 2005; 2007]、多くの研究者が基本的に同意している [Afram and Pfisterer 2010; Grenet 2002; 2010; 宮本 2012 など]。

14) なおグルネは、ソグド地域のサマルカンド近郊の遺跡を複数取り上げ、4世紀後半に認められる防御施設の存在と5世紀以降のその民生用建物への改修の事例を分析した [Grenet 2010]。

## III 佛教寺院の一時的衰退の原因

上で述べてきた考古學的な検討からは、4世紀後半に佛教寺院が確かに機能を縮小していること（I章）、その一方で都城址・居住址の場合、4世紀から5世紀にかけてそのような極端な變遷は認められないこと（II章）、この二點が指摘可能である。すなわち、一見したところでは、佛教寺院のみが4世紀後半に衰退しているように捉えられる。本章ではその原因を考察していきたい。

これまでは、佛教寺院の衰退はバクトリア全體の「社會的危機」の一部と見なされてきた。しかし、II章で確認したとおり、居住址を含めた地域全體がそのような危機に見舞われていたことは考えにくい。さらに、フスマンが指摘するように、カラ・テパやファヤズ・テパの機能衰退に際して暴力的な破壊の痕跡が認められない點も[Fussman 2011, vol.1: 25; vol.2: 261-262]、この見方が正しいことを示唆している。それでは、佛教寺院だけが衰退する原因はどこに求めることができるだろうか。

第一に考えられるのは、當時の政治状況に起因する交易路の一時的途絶である。クシャーン朝という安定した政治勢力が崩壊したあとのバクトリアおよび大ガンダーラ地域では、サーサーン朝の勢力、クシャーン朝の殘存勢力、いわゆるクシャノ・サーサーンの勢力、アルハン・フンの勢力、キダーラの勢力などが3～5世紀にかけて活動していたと見られ、ヒンドークシュ山脈を挟む兩地域の関係はかなり複雑な様相を呈していたことが豫想される。特に問題となる4世紀後半にあつては、少なくとも南バクトリアにおいてサーサーン朝の影響力が増大していると思われるが（註12）を参照）、貨幣學的研究によれば、さらにこの時期にキダーラがバクトリアで勃興し、ヒンドークシュ南側ではアルハン・フンがカーブルにあるサーサーンの貨幣鑄造所を奪って独自の貨幣を発行することが指摘されている[Alram and Pfisterer 2010]。つまり、ヒンドークシュ南北の関係が、クシャーン朝期ほどには一體となっておらず、大ガンダーラ方面からバクトリア地域へと至る交通路<sup>15)</sup>を使用した交易が、一時的に衰退した可能性がある

2010]。そして、この考古學的事象を4世紀後半のいわゆるキオニタエ Chionite の侵入と、5世紀後半のキダーラ支配による發展という政治史的な出來事に結び付けて解釋し、4世紀後半の危機は一時的なものであると結論付けている。グルネはキダーラの登場を5世紀に位置づけているためこのような解釋が成立するのであるが、4世紀後半の遺跡の動態を極端な社會的危機と考えない點では本稿と共通している。註3)も参照。

15) 主要なルートは、スワートを経由してカラコルム西脈を通過するものであったと考えられる[桑山 1985; 1990]。

のである。

當時の佛教寺院の活動が、富裕な信者に代表されるようなパトロンたちの經濟的援助によって成り立っていたことは、行歷僧の傳記や各地で出土する寄進に係わる碑文などからも明らかである。そうしたパトロンたちの富の一部がガンダーラ方面との交易によってもたらされたものであることも、クシャーン朝が崩壊したあとにも大ガンダーラで佛教寺院が大いに榮えていた點を考慮に入れば想像に難くない。實際、政治的に力を持った遊牧民によって交易路が確保され、基本的にはその道に沿って佛教の傳道が行われるという點、そしてそのような商業活動の活發化が佛教教團を支える要因であったという點に關する研究は、特に近年になって多く行われている [Juliano and Lerner 2001; 山田 2010; Neelis 2011]。したがって、もし交易が一時的に衰退していたのであれば、ガンダーラ方面からもたらされるパトロンたちへの富の流入が減少することに直接的につながり、佛教寺院が衰退する一つの重要な原因となったであろう。

第二に、支配勢力そのものも、佛教寺院衰退の原因の一つであることが考えられる。すでに觸れたとおり、4世紀後半のバクトリア（少なくとも南バクトリア）においては、サーサーン朝が政治的な主導權を握っていた可能性が高い。彼らが基本的にゾロアスター教を信奉していることは周知の事實であり、佛教に對して直接的に攻撃をしないまでも、積極的に係わるようなことがなかったこともまた確實である<sup>16)</sup>。つまりこの時期のバクトリアの佛教は、經濟的庇護も政治的庇護も受けることができない状況に陥っていたと考えられるのである。

經濟と政治という兩面の變化によって佛教寺院が衰退していく様子は、かつて桑山が指摘した6世紀後半以降のガンダーラ佛教の衰退を想起させる [桑山 1990]。特に交易路から外れることによる經濟的損失がガンダーラ佛教を崩壊に追い込んだ主要原因であったわけだが、かなり近似した状況が4世紀後半のバクトリア佛教に起こっていた可能性が高い。さらにバクトリアは、當時の佛教文化圏の廣がり考えた場合、その中心とは決して言えない場所である。そのため、そもそも佛教の「教え」を擔う専門家としての出家者の中で、主導的な役割を果たせる人物については、大ガンダーラ方面から招聘していたことも考えられる。交易路の不通は、こうした出家者およびその人物が擔う最新の佛教教學の流入が途絶することにも直結するのであり、バクトリア佛教の衰退は、

---

16) シャープブル2世がキリスト教徒に對して嚴しい迫害を行ったことから、佛教に對しても同様に迫害があったのではないかと考える向きもあるかもしれないが、それを實證する資料はなく (ボイス 2010: 231)、さらに暴力的な破壊を示す考古學的證據もこれまでのところ見つかっていない。

富・人・情報といった部分で多面的に進行したことになる。

ただし、バクトリア佛教の衰退は、6世紀後半以降におけるガンダーラ佛教の衰退とは異なる点がある。それは、一時的に不通となっていたと思われる交易路が復活するということである。榎一雄 [1958] やグルネが提唱する年代観に従った場合、5世紀前半にキダーラがこの交易路を使用してバクトリアから大ガンダーラ方面へと進出する。この点に関しては、研究史を踏まえたうえでグルネが的確にまとめているが [Grenet 2002]、近年、ヒンドークシュ山脈南北の関係を示す非常に重要な遺物がガンダーラ北方のスワートで発見された [ur Rahman, Grenet and Sims-Williams 2006; Grenet 2010]。「フンの王、偉大なるクシャーンシャー、サマルカンドのアフシーン」などと読める銘文が認められる捺印物 sealing であり、その中央に表現された王侯像は明らかにキダーラ貨幣に刻まれた姿と共通する。すなわち、キダーラ期のいずれかの段階で、ソグドと大ガンダーラに密接な関係が存在したことを示しているのである<sup>17)</sup>。この状況は、5世紀後半になってより確実なものとなる。いわゆるエフタルの時代である。近年になって、この集団が4世紀後半にソグドやバクトリアに流入した遊牧民の中にすでに含まれていた可能性や [de la Vaissière 2005; 2007]、その影響が及ぶ範囲内については複数の王によって分割統治されていた可能性が指摘されているが [Melzer 2006; Alram and Pfisterer 2010]、いずれにしろ5世紀後半以降にヒンドークシュ山脈南北が統一的に支配され、その範囲内での移動が容易になったことは [吉田 2011: 24-25]、インド文化やソグド文化が廣範囲に廣まることから明らかである<sup>18)</sup>。佛教が、この段階になって再びインド・ガンダーラ方面からバクトリアに至り、さらに中国側からの影響も受けながら活発な展開を開始するとすれば、カラ・テパ北丘の最近の発掘成果が示すものは、若干の荒廢期を挟んで、エフタル期に早々に復活する教團の様子であるのかもしれない。

以上のような見方は、考古學的データの一つの「解釋」であって、個々の細かな事実とは矛盾する点もあるだろう。さらに、今後新たな證據が発見されることで、まったく異なる解釋が必要になる場合も考えられる。現状の考古學的證據は、クシャーン朝期に活動していた佛教寺院址が4世紀後半に活動を縮小あるいは停止することと、都城址・居住址に関してはそのような極端な變遷は辿らないこと、という二点を明らかにしてい

17) キダーラ勃興の年代が貨幣學者たちの提唱する4世紀後半だった場合、彼らがスワートを經由するルートによって山脈の南北を繋ぐのはさらに早い時期となり、バクトリアにおける佛教寺院の荒廢は非常に短い時間だった可能性が高まることになる。

18) エフタルによる文化的廣がりには、近年の影山悦子の一連の研究に詳しい (2007; 2011 など)。吉田豊は、こうした状態を「エフタルの平和」と呼んでいる。

バクトリアにおける佛教寺院の一時的衰退

のみである。

#### 参 考 文 献

- Альбаум, Л. И. (1960) *Балалык-Тепе*. Ташкент.
- Альбаум, Л. И. (1974) Раскопки Буддийского Комплекса Фаяз-Тепе (По Материалам 1968–1972 гг.). In: В. М. Массон (ред.), *Древняя Бактрия. Предварительные Сообщения об Археологических Работах на Юге Узбекистана*. Ленинград, pp. 53–58.
- Afram, M. and Pfisterer, M. (2010) Alkhan and Hephthalite Coinage. In: M. Afram, D. Klimburg-Salter, M. Inaba and M. Pfisterer (eds.), *Coins, Art and Chronology II*. Wien, pp. 13–38.
- Аннаев, Т. Д. (1988) *Раннесредневековые Поселения Северного Тохаристана*. Ташкент.
- Беленицкий, А. М., Бентович, И. Б. и Большаков, О. Г. (1973) *Средневековый Город Средней Азии*. Ленинград.
- メアリー・ボイス (山本由美子譯) (2010) 『ゾロアスター教 三五〇〇年の歴史』講談社
- Брыкина, Г. А. (ред.) (1999) *Средняя Азия в Раннем Средневековье*. Москва.
- Cribb, J. (1990) Numismatic Evidence for Kushano-Sasanian Chronology. *Studia Iranica*, 19, 151–193.
- Cribb, J. (2010) The Kidarites, The Numismatic Evidence. In: M. Afram, D. Klimburg-Salter, M. Inaba and M. Pfisterer (eds.), *Coins, Art and Chronology II*. Wien, pp. 91–146.
- 榎一雄 (1958) 「キターラ王朝の年代について」『東洋學報』41-3, 1–52.
- Fussman, G. (2011) *Monuments Bouddhiques de Termez I, Catalogue des inscriptions sur poteries*. 2 vols, Paris.
- Grenet, F. (2002) Regional Interaction in Central Asia and Northwest India in the Kidarite and Hephthalite Periods. In: Sims-Williams, N. (ed), *Indo-Iranian Languages and peoples*. Oxford, pp. 203–224.
- Grent, F. (2010) A View from Samarkand: The Chionite and Kidarite Periods in the Archaeology of Sogdiana (Forth-Fifth centuries A. D.). In: M. Afram, D. Klimburg-Salter, M. Inaba and M. Pfisterer (eds.), *Coins, Art and Chronology II*, Wien, pp. 267–281.
- 樋口隆康, 桑山正進 (1970) 『チャカラク・テペ』京都大學
- 岩井俊平 (2003) 「ポスト・クシャン期バクトリアの土器編年」『西アジア考古學』第4號, 41–54.
- 岩井俊平 (2004) 「トハーリストーンにおける地域間関係の考古學的検討」『西南アジア研究』60, 1–18.
- 岩井俊平 (2006) 「アフガニスタンおよび周邊地域の佛教寺院の變遷」『佛教藝術』289, 100–112.
- Juliano, A. and Lerner, J. (eds.) (2001) *Monks and Merchants. Silk Road Treasures from Northwest China*. New York.
- 影山悦子 (2007) 「中國新出ソグド人葬具に見られる鳥翼冠と三面三日月冠 —— エフタルの中央アジア支配の影響 ——」『オリент』50-2, 120–140.
- 影山悦子 (2011) 「ソグド人の壁畫」曾布川寛・吉田豊編『ソグド人の美術と言語』臨川書店, pp. 119–143.
- 加藤九祚 (1997) 『中央アジア北部の佛教遺跡の研究』シルクロード學研究4 シルクロード學研究センター
- 加藤九祚編 (2002) 『ウズベキスタン考古學新發見』東方出版
- Клугликова, И. Т. и Пугаченкова, Г. А. (1977) *Дильберджин. Часть 2*, Москва.

- 桑山正進 (1985) 「バーミヤーン大佛成立にかかわるふたつの道」『東方學報』京都第 57 冊, 109-209.
- 桑山正進 (1990) 『カーピシー・ガンダーラ史研究』京都大學人文科學研究所
- de la Vaissière, E. (tr. Ward, J.) (2005) *Sogdian Traders: A History*. Leiden.
- de la Vaissière, E. (2007) Is There a “Nationality of the Hephthalites”? *Bulletin of the Asia Institute*, 17, 119-132.
- Le Berre, M. (1987) *Monuments Pré-Islamiques de l'Hindukush Central*, Mémoires de la Délégation Archéologique Française en Afghanistan, tome XXIV, Paris.
- Литвинский, Б. А. и Седов, А. В. (1983) *Тепан-шах. Культура и Связи Кианской Бактрии*. Москва.
- Lo Muzio, C. (2012) Remarks on the Paintings from the Buddhist Monastery of Fayaz Tepe (Southern Uzbekistan). *Bulletin of the Asia Institute*, 22, 189-206.
- Melzer, G. (2006) A Copper Scroll Inscription from the Time of the Alchon Huns. In collaboration with Lore Sander. In: J. Braarvig (ed.), *Manuscripts in the Schøyen Collection. Buddhist manuscripts III*. Oslo, pp. 251-278.
- 宮治昭 (2002) 「バクトリアにおける歴史の興亡と佛教美術の誕生」加藤九祚編『ウズベキスタン考古學新発見』東方出版, pp. 70-89.
- 宮本亮一 (2012) 「バクトリア語文書中に見えるカダグスタンについて」『東方學報』京都第 87 冊, 448-413.
- 水野清一編 (1962) 『ハイバクとカシュミルスマスト』京都大學
- Neelis, J. (2011) *Early Buddhist Transmission and Trade Networks. Mobility and Exchange within and beyond the Northwestern Borderlands of South Asia*. Leiden and Boston.
- シャキル・ピダエフ (加藤九祚譯) (2001) 「ザール・テパ都城址」『アイハヌム』2001, 27-44.
- シャキル・ピダエフ・加藤九祚 (2007) 「カラテパ北丘・西 (中) 丘の發掘 (1998-2007)」『アイハヌム』2007, 59-131.
- Pugachenkova, G. A. (1991/92) The Buddhist Monuments of Airtam. *Silk Road Art and Archaeology*, 2, 23-41.
- Пугаченкова, Г. А., Ртвеладзе, Е. В., и др. (1978) *Дальверзинтене*. Ташкент.
- ur Rahman, A., Grenet, F. and Sims-Williams, N. (2006) A Hinnish Kushan-shah. *Journal of Inner Asian Art and Archaeology*, I/2006, 125-131.
- エドヴァルド・ルトヴェラゼ (帶谷知可譯) (2006) 『アレクサンドロス大王東征を掘る 誰も知らなかった足跡と眞實』NHK ブックス 1059, 日本放送出版協會
- Седов, А. В. (1987) *Кобадиян на Пороге Раннего Средневековья*. Москва.
- Sims-Williams, N. (2000) *Bactrian Documents from Northern Afghanistan I: Legal and Economic Documents*. Oxford.
- Sims-Williams, N. (2007) *Bactrian Documents from Northern Afghanistan II: Letters and Buddhist Texts*. London.
- Sims-Williams, N. (2008) The Sasanians in the East. a Bactrian archive from northern Afghanistan. In: V. S. Curtis and S. Stewart (eds.), *The Sasanian Era*. London, pp. 88-102.
- Sims-Williams, N. (2012a) *Bactrian Documents from Northern Afghanistan I: Legal and Economic Documents (revised edition)*. London.
- Sims-Williams, N. (2012b) *Bactrian Documents from Northern Afghanistan III: Plates*. London.



- Соловьев, В. С. (1996) *Раннесредневековая Керамика Северного Тохаристана*. Елец, 創價大學シルクロード學術調査團編 (1996) 『ダルヴェルジンテバ DT25』 ウズベク共和國文化省ハムザ記念藝術學研究所・創價大學
- 創價大學シルクロード研究センター編 (2012) 『ダルヴェルジンテバ佛教寺院址』 ウズベキスタン共和國科學アカデミー藝術學研究所・創價大學シルクロード研究センター
- Ставиский, Б. Я. (ред.) (1964) *Кара-Тепе -Буддийский Пещерный Монастырь в Старом Термезе-*. Москва.
- Ставиский, Б. Я. (ред.) (1969) *Буддийские Пещеры Кара-Тепе в Старом Термезе*. Москва.
- Ставиский, Б. Я. (ред.) (1972) *Буддийский Культовый Центр Кара-Тепе в Старом Термезе*. Москва.
- Ставиский, Б. Я. (ред.) (1975) *Новые Находки на Кара-Тепе в Старом Термезе*. Москва.
- Ставиский, Б. Я. (ред.) (1982) *Буддийские Памятники Кара-Тепе в Старом Термезе*. Москва.
- Ставиский, Б. Я. (ред.) (1996) *Буддийские Комплексы Кара-Тепе в Старом Термезе*. Москва.
- 田邊勝美 (1994) 「ローマと中國の史書に秘められた「クシャノ・ササン朝」」『東洋文化研究所紀要』124, 33-101.
- 田邊勝美 (2011) 「アフガニスタン北部, オクサス流派の石灰岩製彫刻の研究」梅村坦・新免康編『中央ユーラシアの文化と社會』中央大學出版部, pp. 3-95.
- 田邊勝美・堀咲他 (1997) 「ダルヴェルジン・テベ城砦址の發掘 (1996 年度)」『古代オリент博物館研究紀要』XVII, 101-117.
- 田邊勝美・堀咲他 (1998) 「ダルヴェルジン・テベの發掘 (1997 年度概報)」『古代オリент博物館研究紀要』XVIII, 157-212.
- 田邊勝美・堀咲他 (1999) 「ダルヴェルジン・テベの發掘 (1998 年度調査の概報)」『古代オリент博物館研究紀要』XIX, 73-140.
- 田邊勝美・堀咲他 (2000) 「ダルヴェルジン・テベの發掘 (1999 年度調査の概報)」『古代オリент博物館研究紀要』XX, 101-162.
- 田邊勝美・山内和也他 (2001) 「ダルヴェルジン・テバの發掘 (2000 年度調査の概報)」『古代オリент博物館研究紀要』XXI, 89-151.
- 山田明爾 (2010) 「インダス越えて — 佛教の中央アジア —」奈良康明・石井公成編『文明・文化の交差点』新アジア佛教史 05 中央アジア, 佼成出版社, pp. 14-61.
- 吉田豊 (2011) 「ソグド人とソグドの歴史」曾布川寛・吉田豊編『ソグド人の美術と言語』臨川書店, pp. 7-78.
- Завьялов, В. А. (2008) *Кушанишахр при Сасанидах по Материалам Раскопок на Городище Зартепа*. Санкт-Петербург.
- Zeimal, T. I. (1999) On the Chronology of the Buddhist Site of Kara-Tepe. In: M. Alram and D. Klimburg-Salter (ed.), *Coins, Art and Chronology. Essays on the pre-Islamic History of the Indo-Iranian Borderlands*, Wien, pp. 413-421.

※本稿は、京都大學人文科學研究所の研究班「南アジア北邊地域における文化交流の諸相」(班長：稻葉穰)における研究成果の一部である。同研究班において 2012 年 2 月 10 日に口頭發表し、國際學會“Afghanistan Meeting 2012: Between Sogdiana and Gandhāra”において同 3 月 5 日に英語で口頭發表した内容を基にしている。一連の發表に關しては、參加者の方々から多くのご教示をいただいた。感謝申し上げる次第である。

## Temporal Decline of Buddhist Sites in Bactria

Shumpei IWAI

According to archaeologists of the former Soviet Union, a serious social crisis struck the Bactria region in the latter half of the 4th century, the so-called “early medieval period”, which means a transitional phase from the ancient slave society to the medieval feudalism. This article examines this hypothesis.

First, we check the archaeological data concerning Buddhist sites in Bactria. At Kara Tepa in Uzbekistan, we can date the life of the sites by investigating the pottery and coins. Those archaeological data indicate that a broad area was used for burial sites at the end of the 4th century. The same decline could be observed in the latter half of the 4th century at the second Buddhist temple of Dal’verjin Tepa, where we can safely date the end of the usage of the building as a Buddhist site by the radiocarbon dating and the analysis of the pottery excavated from the floor. Although the examples we have are not exhaustive, we do not find so far any evidence that demonstrates the continuity of other Buddhist temples in Bactria beyond the end of the 4th century.

Second, we review ancient cities and forts in the region in question. Some archeologists of the former Soviet Union said that almost all cities had declined by the end of the 4th century and new, small castles or fort-like buildings appeared in the 5th century, which marked the beginning of medieval feudalism. However, from the archaeological point of view, there remain cultural layers of the 5th century at Dal’verjin Tepa and Zar Tepa. In addition, Kuyovkurgan and the citadel of Zar Tepa, both said to be typical fort-like buildings appearing in the middle of the 5th century, turn out to have been constructed in the 6th-7th centuries judging from the pottery assemblage. Thus, we can say that the collapse of old cities and the emergence of new fort-like buildings weren’t concentrated in the latter half of the 4th and the 5th centuries.

As seen above, the archaeological data suggest that it is difficult to suppose the existence of a “social crisis” in the whole Bactria region. Why then did only Buddhist sites temporarily decline in the latter half of the 4th century? From recent studies, we know

that several political powers such as Sasanians, Kushano-Sasanians, Alkhans and Kidaras entered into Bactria and Gandhara after the collapse of the Kushans. Presumable conflicts and struggles among those powers could have prevented regular connections, which had been maintained theretofore, between the north and the south of the Hindukush. This means that the influence of Gandharan Buddhism no longer reached Bactria through the traditional trade routes. Moreover, we can easily imagine that the rulers of Bactria at the end of the 4th century (presumably Sasanians judging from Bactrian documents) had no interest in Buddhism. In this way, Bactrian Buddhism lost its patrons and gradually declined because of political and economic problems.

## Temporal Decline of Buddhist Sites in Bactria

Shumpei IWAI

According to archaeologists of the former Soviet Union, a serious social crisis struck the Bactria region in the latter half of the 4th century, the so-called “early medieval period”, which means a transitional phase from the ancient slave society to the medieval feudalism. This article examines this hypothesis.

First, we check the archaeological data concerning Buddhist sites in Bactria. At Kara Tepa in Uzbekistan, we can date the life of the sites by investigating the pottery and coins. Those archaeological data indicate that a broad area was used for burial sites at the end of the 4th century. The same decline could be observed in the latter half of the 4th century at the second Buddhist temple of Dal’verjin Tepa, where we can safely date the end of the usage of the building as a Buddhist site by the radiocarbon dating and the analysis of the pottery excavated from the floor. Although the examples we have are not exhaustive, we do not find so far any evidence that demonstrates the continuity of other Buddhist temples in Bactria beyond the end of the 4th century.

Second, we review ancient cities and forts in the region in question. Some archeologists of the former Soviet Union said that almost all cities had declined by the end of the 4th century and new, small castles or fort-like buildings appeared in the 5th century, which marked the beginning of medieval feudalism. However, from the archaeological point of view, there remain cultural layers of the 5th century at Dal’verjin Tepa and Zar Tepa. In addition, Kuyovkurgan and the citadel of Zar Tepa, both said to be typical fort-like buildings appearing in the middle of the 5th century, turn out to have been constructed in the 6th–7th centuries judging from the pottery assemblage. Thus, we can say that the collapse of old cities and the emergence of new fort-like buildings weren’t concentrated in the latter half of the 4th and the 5th centuries.

As seen above, the archaeological data suggest that it is difficult to suppose the existence of a “social crisis” in the whole Bactria region. Why then did only Buddhist sites temporarily decline in the latter half of the 4th century? From recent studies, we know

that several political powers such as Sasanians, Kushano-Sasanians, Alkhans and Kidaras entered into Bactria and Gandhara after the collapse of the Kushans. Presumable conflicts and struggles among those powers could have prevented regular connections, which had been maintained theretofore, between the north and the south of the Hindukush. This means that the influence of Gandharan Buddhism no longer reached Bactria through the traditional trade routes. Moreover, we can easily imagine that the rulers of Bactria at the end of the 4th century (presumably Sasanians judging from Bactrian documents) had no interest in Buddhism. In this way, Bactrian Buddhism lost its patrons and gradually declined because of political and economic problems.

The Tōhō Gakuhō Journal of Oriental Studies (Kyoto) No. 88 (2013) 402~359

## Kābul in the Premodern Period :

### Historical Shifts of the Regional Center in Eastern Afghanistan

Minoru INABA

There is much obscurity in the history, especially the pre-modern history, of Kabul, the present capital of the Islamic Republic of Afghanistan. In this paper, an attempt has been made to elucidate as much as possible the history of the city from ancient times up to the 18th century, by integrating the results of the researches on the literary sources, the analyses of archaeological materials, and numismatic studies. As a result, though still provisional, the following conclusions have been attained : 1) In eastern Afghanistan, the regional center shifted according to the politico-military setting among three historical cities, that is, Kābul, Kāpīśī, which was located at the archaeological site of Begram about 50 km by map to the north of Kābul, and Ghazni, which is located 140 km to the southwest of Kābul and flourished from the end of the 10th century as the royal capital of the Ghaznavid empire. 2) Those shifts of the politico-economic center of the region had been related to the geographical circumstances characterized by presumably limited agricultural production and enormously vigorous mercantile activities.